



▲川上村迫付近で寸断された国道169号線



▲三之公、明神出合から明神滝へ至る登山道の惨状



▲台風12号の強風で折れてしまった水源地の森の巨木

9月に来襲した台風12号、15号はテレビなどで大きく報道されたように、奈良県に大きな被害をもたらしました。川上村でも国道169号線が現場近くの西谷橋付近で深層崩壊による土砂崩れで寸断されるなどの大きな被害がありました。幸いなことに森と水の源流館では大きな被害も無く、通常通り開館しております。

また、「吉野川源流—水源地の森」のある三之公では、明神出合から明神谷、隠し平へ至る登山道が土砂崩れや倒木で通行困難になってしまいました。しかし、水源地の森の中には、いくらかの倒木はありましたが、今のところ、大きな被害もなく安堵しています。現在、吉野川下流側からは国道を通って直接、森と水の源流館までお越しいただけます。この件で多くの関係者のみなさまから「心配いただき、お見舞いいただきました。この場を借りて、御礼申し上げます」とともにみなさまのご来館をお待ちしております。

源流人会会員の声

藤木三久(源流人会会員)

3年前の吉野の森エコツアーが、私と源流館、川上村のご縁の始まりでした。たまたま偶然で桜井の木材商店の泉谷さんと出会い、そのご紹介で始まったエコツアー。辻谷館長(当時)のご案内で水源地の森と源流館の森に初めて行きました。参加メンバーは、関西を中心とする環境プランナーの集まりで、東京、四国からも参加があり多彩な顔ぶれに加えて、川上村高原地区出身の民社さんも同行いただきました、たいへん楽しく有意義なものとなりました。



▲吉野の森エコツアー 2008/5/24より

村の特徴をさらに詳しく知ることができるとともに、源流館スタッフの皆様とも少しずつ繋がりが増えて、今や同じ奈良県に住むものとしてたいへん身近な存在となっています。



▲水源地の森ツアー 2010/4/25より

私は、奈良県生駒市に在住し、大阪の電器メーカーに勤務しています。社内では環境関係の仕事を担当しており、現在は工場関係の環境配慮活動を推進しています。また、CSR活動の一環として地域の環境保護活動にも取り組んでいます。特にボランティア活動として、BYOS(琵琶湖、淀川、大阪湾、瀬戸内海の水系繋がりをそれぞれ近場の系列工場で環境保全活動を行い、その活動を繋げていくもの)という活動が気に入っています。水系繋がりで大阪湾、瀬戸内海といえば、吉野川も繋がりますし、広がっていくイメージがとってもいいなと思います。こういう活動に多くの社員が個人としても参加し、地域での保全活動が活性化していくことを願っています。

日常的に社外でも関西を中心に、環境プランナーの繋がりをきっかけに、同じような環境保護に関心のあるメンバーと情報交換などフェイスブックを活用した交流をしています。同じ奈良県といっても私の住む生駒高山は北の端にあり川上村との距離は結構遠いですが、この高山にも準絶滅危惧種のオオタカが生息する素晴らしい里山風景があります。奈良繋がりを大切にして、この吉野の素晴らしい森や里山の良さを伝えていきたいと思えます。今後とも、源流館や源流人会の皆様よろしくお願ひします。

ぽたたい

源流のひとしづく

冬 第22号

ぼたたい 源流のひとしづく 第22号 発行日 平成23年11月発行
発行所 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館

TEL 0746・52・0888

ぽたたい
源流のひとしづく



CONTENTS

- ・後南朝総説
- ・幻の後南朝
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・台風被害報告
- ・会員の声

森と水の源流館
住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL http://www.genryuu.or.jp
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

「吉野川源流—水源地の森」の一番奥の谷で台風12号、15号による激流に耐えたシオジの巨木。幹の下部にはぽっかりと穴が空いてしまいましたが、何事もなかったかのように立派に立っていました。

源流人会募金

源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育ててゆくことである。

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆくことである。

仲間を紹介ください

年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,000円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

水源地の森守募金にご協力ください

お寄せいただいた募金は、水源環境向上の一環として、斜面崩壊地での土砂流出防止の木柵設置事業「芽吹きの砦プロジェクト」などに役立てます。

毎年9月の第2日曜日は「水源地の森守募金」の日。「水源地」を守り伝えてゆくための活動を盛上げてゆきましょう。組み立て式の募金箱を配布しています。

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

伊藤ふくおさん(昆虫生態写真家)、古山曉さん(和歌山大学大学院)を迎え、地元、北長田地区のみなさんと一緒に生き物を探しました。田んぼ周辺では、カイミジンコ、ホウネンエビ、カブトエビなどが泳ぎ回る中、世界の侵略的外来種ワースト100選定種(注1)のスクリミンゴカイ(ジャンボタニシ)がはい回っていました。周辺の草本では特定外来生物(注2)のナルト



▲アカメガシワ



▲クサガメの解説をする伊藤ふくおさん
クサガメも史前帰化種(注4)とされています。一見のどかな景観でしたが、侵略的外来種がかなり入っていることがわかりました。水路ではカワヨシノボリやギンブナなどの魚類が捕れたり、水田内ではゲンゴロウの幼虫が見つかったりするなど、いろいろな発見もありました。川上村で生まれた水が、この周辺の田畑では使われていますが、その水を頼りにしている生き物もたくさんいるということを確認し、田んぼ周辺の環境の大切さを学んだ一日でした。

6月26日に吉野川(紀の川)中流域にあたる和歌山県紀の川市北長田地区で水田やその周辺環境に生きている生き物の観察を行いました。講師には



▲クサガメ

注1) 国際自然保護連合(IUCN)の種の保全委員会が定めた、本来の生育・生息地以外に侵入した外来種の中で、特に生態系や人間活動への影響が大きい生物のリスト。
注2) 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」により指定された日本在来の生物を捕食したり、これらと競合したりして、生態系を損ねたり、人の生命・身体、農林水産業に被害を与えたりする、あるいはそうするおそれのある外来生物。飼育や移動が規制されており、違反した場合、個人には3年以下の懲役や300万円以下の罰金、法人には1億円以下の罰金が科される。
注3) 特定外来種には選定されていないが、適否について検討中、または調査不足から未選定とされている生物種。
注4) 侵入の記録が確かな明治元年以前に日本に侵入したと推測されるが、確かな記録を確認するのが困難な外来種。

吉野川紀の川中流域で田んぼの生き物をしらべよう



サワギクが繁茂していています。ため池に仕掛けられたワナには、アメリカザリガニ、クサガメ、スッポンが入っていました。アメリカザリガニは要注意外来生物(注3)、クサガメも史前帰化種(注4)とされています。一見のどかな景観でしたが、侵略的外来種がかなり入っていることがわかりました。水路ではカワヨシノボリやギンブナなどの魚類が捕れたり、水田内ではゲンゴロウの幼虫が見つかったりするなど、いろいろな発見もありました。川上村で生まれた水が、この周辺の田畑では使われていますが、その水を頼りにしている生き物もたくさんいるということを確認し、田んぼ周辺の環境の大切さを学んだ一日でした。



▲ナルトサワギク



▲ムカシトンボ



▲カワヨシノボリの卵

8月6日、川上遊水フェスタと併せて、「水生生物をしらべよう」を開催しました。当日は午前と午後の2回に分けて、講師には谷幸三さん(大阪産業大学非常勤講師)をいて開催しました。



▲谷幸三さん
参加者のみなさんは、それぞれ、網やザルで音無川の川底をさがそと探していきました。1時間ほどでたくさんのお水生生物が集まり、谷さんが種類を確認していきました。今年で3回目ですが、別表の通り、きれいな川でしかすめない種16種、少し汚れた水でもすめる種10種、汚れた水でもすめる種1種が見つかり、蜻蛉の滝周辺の水質は「きれいな水」から「少し汚れた水」であることがわかりました。また、「汚れた」、あるいは

水生生物をしらべよう

まには会場の手配や、観察路のご案内など大変お世話になりました。この場をお借りして感謝します。

8/6 水生生物をしらべよう調査結果

河川名: 音無川
調査地点: 蜻蛉の滝の少し下流
2011年8月6日
天候: 晴れ
気温: 32℃
水温: 23℃
まわり: 渓谷
川岸: 護岸
調査地点: 平瀬
川底: 小石と砂
水深: 10-30cm
流水の速さ: ゆるやかに
にごり: 無し
臭気: 無し
ゴミ: 無し

- I. きれいな水でないとする種 16種
- アマゴ
 - カジカガエル
 - サワガニ
 - ミルンヤンマ
 - ヒメクロサナエ
 - フタスジモンカゲロウ
 - ヒメオオヤマカワゲラ
 - ナベフタムシ
 - シマアメンボ
 - モンキマメゲンゴロウ
 - オナガミズスマシ
 - マルガムシ
 - ヘビトンボ
 - ニンギョウトビケラ
 - ヒゲナガカワトビケラ
 - ムカシトンボ

- II. 少し汚れた水でもすめる種 10種
- カワムツ
 - カワヨシノボリ
 - ツチガエル
 - シロタニガワカゲロウ
 - コオニヤンマ(成虫)
 - ダビドサナエ
 - ヤマトクロスジヘビトンボ
 - ウルマーシトビケラ
 - ハグロトンボ
- III. 汚れた水でもすめる種 1種
- ガガンボの幼虫
- IV. 大変汚れた水でもすめる種 なし

「濁った」とはが進んでいる、つまり川の生き物にとっては食べ物がたくさんあるということですから、汚れたという尺度が一概に悪いことではないことなどについてわかりやすく学びました。



▲ナベフタムシ

永享元年(1429年)、親王は川上村東川に拠点を移動。嘉吉3年(1443年)に没しました。住吉神社が親王の墓と伝えられています。

皇位奪還の夢は親王の子、泰仁王(天基親王)・義有王(円満院)・尊義王(空因・金蔵主)に受けつがれました。

嘉吉3年、泰仁王・義有王・尊義王は「禁闕の変」を起こします。その際、泰仁王は戦死、義有王は神璽と共に川上村三之公に逃れました。

尊義王は近江国に逃れた後、文安元年(1444年)に三之公に移って即位(中興天皇)、義有王は征夷大将軍に任じられました。文安2年(1445年)、尊義王と義有王は紀伊国で挙兵しましたが、同5年(1448年)に義有王が戦死したため尊義王は近江国甲賀に脱出、その地で尊秀王(自天王)・忠義王が誕生しました。その後、尊義王・尊秀王・忠義王は三之公に戻り、隠平・八幡平に御所を構えました。このとき尚尊王が誕生したとされます。

享徳3年(1454年)2月5日、尊義王は尊秀王に譲位、翌年亡くなりました。墓は三之公隠平とあると伝えられています。

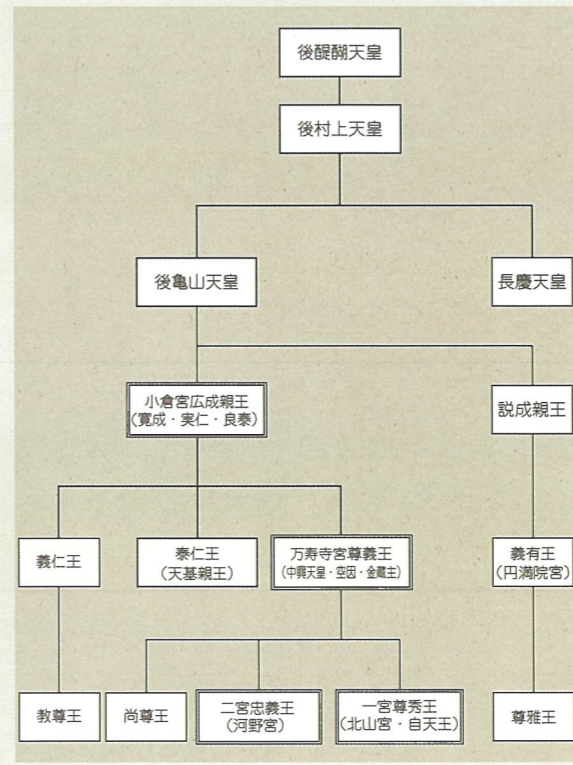
康正元年(1455年)尊秀王・忠義王は大河内(三重県紀和町)に拠点を移し、翌年北山(奈良県上北山村)に移動しました。忠義王は征夷大将軍に任じられ、河野郷(川上村神之谷)に移り、義有王の子の尊雅王は三之公に移りました。

長祿元年(1457年)、「長祿の変」で尊秀王が赤松家遺臣に討たれると、橘将監(楠木正儀の子とされる)・大西助五郎らは王の首と神璽を奪還、川上村神之谷の金剛寺に葬ったと伝えられています。

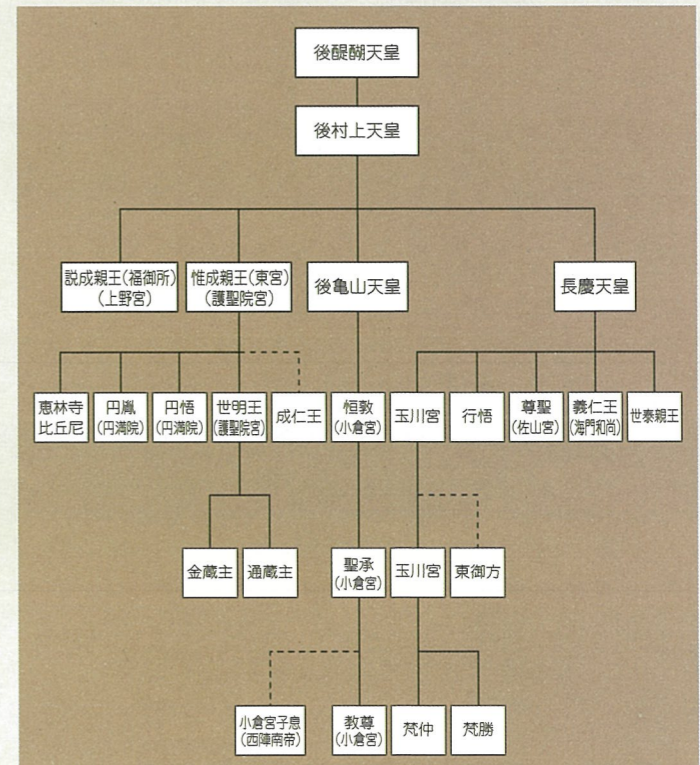
忠義王については赤松家遺臣に討たれたという伝承と川上村高原に逃れてそこで亡くなったという伝承があります。

参考文献
川上村史編集委員会編『川上村史 通史編』1989 川上村

川上村の伝承に基づく後南朝系図



史料に基づく後南朝系図



(森茂暁『南朝全史』(2004 講談社)ほかを参照)
(・・・線は推定)

後南朝総説

歴史担当の成瀬匡章が、川上村の歴史について紹介します。

(1) 後南朝とは

後南朝とは明徳3年(1392年)の南北朝合一後に発生した南朝皇胤による皇位奪還運動のことです。

後醍醐天皇による建武の新政が破綻し、延元元年(1336年)から室町幕府が支える北朝と、吉野に本拠を移した後醍醐天皇の南朝の争いが起こりました。南朝は次第に劣勢になり、明徳3年に南朝3代目の後亀山天皇が京都に帰還し、北朝の後小松天皇に位を譲る形で南朝と北朝の争いに終止符が打たれました。その際、今後は北朝(持明院統)と南朝(大覚寺統)が交代で皇位継承することなどが決められました。

しかしそれが守られなかったため、応永17年(1410年)に後亀山上皇が吉野へ脱出、同20年(1413年)、北朝の後小松天皇が皇子の実仁(躬仁)親王(称光天皇)に譲位すると、それに抗議して伊勢国司北畠満雅を中心とする旧南朝方が挙兵しました。この時は上野宮説成親王(後亀山上皇の弟)の調停で和睦が成立し、上皇は京都に戻りました。

しかし、正長元年(1428年)称光天皇が亡くなり、その跡を北朝の伏見宮彦仁王(後花園天皇)が継ぐことになると、北畠満雅は小倉宮聖承(後亀山上皇皇子恒教の子)と共に再度挙兵しましたが、満雅が戦死したため小倉宮聖承は京都に戻りました。

嘉吉3年(1443年)、日野有光が後花園天皇の暗殺・三種の神器の強奪を企て、通蔵主・金蔵主兄弟(後亀山上皇弟の性成親王の孫)と共に御所を襲撃しました。この事件を「禁闕の変」といいます。この事件はすぐに鎮圧されましたが、三種の神器の一つ神璽は後南朝方に持ち去られ、以後14年にわたり後南朝が神璽を保持し続けました。

長禄元年(1457年)12月2日、嘉吉の変(赤松満祐が六代将軍足利義教を暗殺した事件)で取り潰された赤松家を再興させる条件として神璽の奪還を命じられた石見太郎、丹生屋常刀、上月満吉、中村貞友らは、上北山村と川上村にいた後南朝の一宮・二宮を殺害、神璽を奪回しました。これを「長禄の変」と呼びます。

この後、応仁・文明の乱(1467~1477年)の際、西軍に擁立された「西陣南帝」を最後に後南朝は記録から姿を消します。

歴史の闇に消えた後南朝ですが、川上村では一宮・二宮の墓や遺品が村民の手によって手厚く守られており、宮を祀る朝拜式が550年以上途絶えることなく続けられています。

参考文献

- 川上村史編集委員会編『川上村史 通史編』1989 川上村
- 後南朝史編集会編・滝川政次郎監修『後南朝史論集』1956 新樹社(原書房より1981再版)
- 森茂暁『闇の歴史・後南朝』1997 角川書店
- 森茂暁『南朝全史』2004 講談社
- 「特集・検証 後南朝秘録」『歴史読本 No.816』2007 新人物往来社

(2) 川上村の後南朝伝承

川上村には後南朝の伝承が多く残されていますが、それぞれ多少の相違が見られます。それらをまとめるとおおよそ以下の通りになります。

南朝の皇太子であった小倉宮広成親王(寛成・実仁・良泰ともいう)は、南北朝合一時の約束に反した称光天皇即位に抗議し、応永21年(1414年)に伊勢国司北畠満雅と共に挙兵、その際、称光天皇の次に南朝方が皇位を継ぐことで和議が結ばれました。ところが称光天皇が崩御すると、次の天皇として北朝方の後花園天皇が即位しました。そのため親王は北畠満雅と共に正長元年(1428年)に再度挙兵しました。

幻の後南朝史論 成瀬の注釈

(いさぶろ・いしもと 著)

注1 花岡大学(1909~1988年)

大淀町佐名伝出身の児童文学作家。仏教説話を題材にした童話を数多く執筆している。1960年に小川未明文学賞奨励賞、1961年には小学館文学賞を受賞している。著作は『花岡大学伝典童話全集』(法蔵館1979年 全8巻)などに収められている。

注2 吉野史談会

花岡大学が大淀高校歴史研究部顧問を務めていた1956(昭和31)年に設立した研究会。吉野をテーマにした機関誌『吉野風土記』(1956-1968)を発行していた(第30巻まで刊行)。

注3 吉野皇子五百年忌

昭和31年(1956年)自天王(一宮・北山宮)の500年忌を迎えるに際して、川上村で行われた行事。その記念事業の一つとして瀧川政次郎監修の論文集『後南朝史論集』(新樹社 1956年)が出版された。本書は現在でも後南朝研究の基本的な文献になっている。

注4 岸田日出男(1890~1959年)

東吉野村木津生まれ。奈良県林務課・観光課の技師として、吉野熊野国立公園の指定と調査、自然保護に尽力した。また吉野地方の民俗・郷土史・ニホンオオカミなどの研究も行っている。著書に『吉野群山』(郷土研究社 1936年)などがある。

注5

川上村の神社のうち、神像調査は西河の十二社神社、井光の十二社神社、北塩谷の天武天皇神社の三社のみで、西河、井光の御神像は十三体、北塩谷の天武天皇神社は一体と聞く。また、十二社神社は川上村内には特に多く十一社を数え、何れも熊野那智大社を勧請したものと伝えられている。

林宏著『吉野の民俗誌』(頁三一九)によると

(前略)大迫の口碑によれば、十二社権現は元来柏木の氏神であったものが、どんな事情からか、柏木の本家株が次々と大迫へ出て来てハナシ(焼畑)を作って住みつき、中には伯母谷へ行って住んだ家もあって、柏木の祭りがおろそかになったので、大迫と伯母谷とで代わる代わる祀るようになった。ところがそこでは不便なので十二社(実は十三体あって一体は茶坊主だと云う)のうち七体は大迫、伯母谷の氏神として現地に奉還し、同時に伯母谷と大迫の八王子社を本殿の左右の小祠に遷して祀った。(中略)一方十二社の残りの六体は、吉野川の対岸の神之谷舞場垣内の上手に遷され、柏木、北和田、上多古の三地区の氏神となっている。これが今の若宮すなわち若年神社だという。(後略)

注6 上月文書

長禄の変で二宮(忠義王)を討ち取った上月将監(満吉)が、事件の21年後に書き記したもので、後南朝研究の一級史料とされる。

『群書類従 第二十一輯』には「上月記」として収録されているので、以下一部を引用する。

南方御退治条々

(前略)

- 一、同夜半子於吉野河野郷奉討南方二宮同伺候人宇野大和守。高野山智莊院弟子定順、同次郎三郎此四人討捕訖。大勢者不被入。子細見手前着到次第不同
上月左近将監奉討二宮御頭
中村弾正忠奉持二宮御頭
於路次討死

「上月記」には長禄元年12月2日夜子の刻、河野郷の行在所(現在の清谷神社付近)で上月将監(満吉)と中村弾正忠(貞友)が、二宮(忠義王)と二宮の伺候人、宇野大和守、高野山知莊院弟子定順、同次郎、三郎の四名を討取った。上月左近将監が二宮を討ち取り、中村弾正忠は二宮の首を持っていたが、帰路討死したとある。

川上村寺尾区にはかつて「御首載岩」と呼ばれる岩があり、郷土大西助五郎が中村弾正忠を討ち取り、取り返した宮の首を載せたという伝承があった。この宮は自天王であるという人もいるが、「上月記」の記述は「御首載岩」に載せられたのは二宮の首であったことを示している。

著者紹介

いさぶろ・いしもと

1924年11月25日、川上村白屋生まれ。前川上村文化財審議会会長、川上村遺族会副会長。元興寺文化財研究所と川上村白屋区の民俗調査に携わる。

著書として『白屋区誌』(第一法規出版 1991年)がある。

幻の後南朝史論

いさぶろ・いしもと

第一章 「寛三」と故岸田日出男先生

冒頭標題からクイズめいた標題を提示して誠に申し訳ないが、読者の皆さんには「寛三」とは何のことか分かりますか？「かんぞう」と読めば人の名前のようにもあらし、「かんさん」と読めば、ものの名前か地名にも思えます。筆者も最初はピンときませんでした。その経緯（いきさつ）からお話ししましょう。



▲朝拝式

平成22年、大淀町立図書館で花岡大学生誕百年展（注1）が開催された時、筆者が長年探し求めていた『吉野風土記』が展示されていました。昭和30年代、花岡氏を中心として郷土史の研究を続けていた吉野史談会（注2）は、会誌『吉野風土記』にその研究成果を発表していました。

ちょうどその頃、川上村で吉野皇子五百年忌（注3）が挙行されることになり、その記念事業として『後南朝史論集』が出版されることになりました。

國學院大学教授瀧川政次郎氏などの後南朝研究者に加え、吉野史談会の岸田日出男氏（注4）にも執筆依頼がされました。

岸田氏は川上村大滝区の辻井家が所蔵する「更矢家重代日々記憶録」（以下「更矢文書」）を最重要視していました。冒頭の「寛三」とは、この古文書が寛文三年（1664年）正月二十五日に書写されたことからきています。

岸田氏の言葉を借りれば「冷静な気持ちで、その内容中吉野郡内についていろいろな角度から検討を続けたのであるが、真実を肯定されることが夥しく存在するものがある。しかるに、この郡内における真相は今まで殆ど知られていない。又「寛三」にはこれらの真相が詳しく記されており、一点の疑問をはさむ余地はないのである。然るに、中には寛三に対して少しの検討もしないで、これを頭ごなしに、或いは又、地理を知っている者の偽作だと云って排斥する人がいるが、このような処置は誠に遺憾である」と最後に「寛三」を重要視しない者達を叱責されています。

筆者は偶然にも岸田氏と同じく「更矢文書」を最重要視しており、後段この文書の重要性を実証したいと思います。

岸田氏の論文「後南朝の歴史とその史蹟の研究」は『後南朝史論集』には採録されなかったものの、「吉野風土記」の後南朝特集号に掲載され、関係者には岸田論文が読まれることになりました。しかし「吉野風土記」は一般には出回らず、結果、岸田論文は幻の論文となったのです。

標題の「寛三」及び幻の論文の意味がこれで理解されたと思います。

後に「寛三」は『川上村史資料編』に「南朝誌」として紹介されましたが、年代的にはトップに記されるべきものであるのに、宮内庁書陵部吉津長治郎氏の書写日である昭和35年10月25日を以て目次最後尾に掲載されており、かなり軽視された扱いとなっています。



▲清谷神社（河野宮行宮跡伝承地）

第二章 更矢文書と若年神社

「更矢文書」は寛文3年（1664年）に更矢伊兵衛良勝によって書写されたといわれる古文書で「内容が真実性が夥しく多く含まれ（岸田論文による）」ており川上村にとっては最も重要な古文書と言えます。

筆者も岸田氏と全く同一観点からこの古文書を精読してきた一人です。但し、筆者がこの古文書に興味を持った理由は、岸田氏が「河野宮行宮跡」の研究から始まったのに対し、筆者は「更矢文書」の次の一節の読解から始まります（『川上村史資料編』下巻頁一五四より）

（前略）吉野十八郷、熊野八庄司の諸士御式場吉野河原筒風呂磧の周囲を幾重にも取り巻き御警衛申上げたり、当日洞院・葉室両侍従以下悉く柏木前の吉野川にて早朝より水垢を取り、身を清めて参殿せり、又里の乙女子を召し舞楽を奉し、以て千秋万歳を祝ひ奉る、此の日年号を立て、天清と号し、円満院宮義有王様を以て征夷大將軍に任じ給ひ、楠木次郎正秀公を以て軍師と為し、円満院の宮様を助け、先づ十津川に討ち出で、以て諸国御征伐を仰せ渡さる、（中略）



▲神之谷 御座磧・御座窟

これより御即位御大禮御執り行かせ給う所を御座磧と云ひ、舞楽の所舞場と云ひ、乙女子の水垢取りし所大岩川の中に在る深ふち也、此の所御子石淵と謂う、後尊秀王様ご即位の時の御座所江宮趾を建立し十二神を奉詞す、（後略）

以上の「更矢文書」にある「御座磧」「舞場」「十二神」（十二社神社別名 若年神社）「御子石淵」は五百五十有余年を経て現存しており、岸田氏の言葉通り「更矢文書」の真実性を物語っています。

また筆者は「更矢文書」を読む以前に若年神社に参拝することがありました。

もう8年も前になるうか、筆者の住んでいた川上村白屋区が大滝ダムの試験湛水で地すべり危険地と決定され、全戸が川上村北和田区の小学校跡地の仮設住宅に移住しました。この時分、林宏氏の『吉野の民俗誌』を読み、文中に「柏木在の氏神を分祀するに当たり、御神像十三体があり、うち七体を大迫と伯母谷間の峠の十二社神社へ、あとの六体を若年神社へ分祀」と書かれていたことから、以来、若年神社（法人名は十二社神社）に関心を持っていました。



▲自天王の甲冑

某日、若年神社の関係者（柏木・上多古・北和田の三区でお祀りしていた）に尋ねたところ、「ああ、あの宮さんならほかしたった（廃社した）」と云うびっくり驚天の返事が返ってきました。若年神社は前述の「更矢文書」にある尊秀王の即位式が行われた場所に建立された重要な神社なのです。

そして『吉野の民俗誌』に書かれた御神像六体はどうなっているのか。そこで、筆者は以前の管理責任者の了解を取り付け、礼儀を尽くして神社の調査を決意しました。朽ち果てた錠は簡単には開けられなかったが助手の力を借りて開扉に成功。そして目前に姿を現した御神像は六体ではなく十三体。それも船の上に整然と祀られていたのです（注5）。

この十三体の御神像については、折しも白屋区民俗調査に来村されていた元興寺文化財研究所に鑑定を依頼し、十三体の御神像のうち三体が南北朝時代、十体は室町時代の作と鑑定されました。

まさに「更矢文書」の記述と時代的に一致するものでした。「更矢文書」は上月文書（注6）と比肩する後南朝史の一級史料とってよいでしょう。

更に、若年神社には「舞場」の名にふさわしく、外壁二面に雅楽の舞姫「胡蝶」が描かれており、これも当時民俗調査に来村していた奈良女子大学の大学院生（当時）、何谷有美氏により詳細な研究論文を発表されています。



▲金剛寺の河野宮墓

紙面の都合で以降の事案は又の機会にゆずりますが、過疎がすすむ川上村にとって、神社、仏閣の維持管理が非常に困難な時代に直面しています。しかし、歴史的に重要なものについての認識は岸田論文の如く幻に終わらせてはなりません。この意味からここ数年、年を重ねるにつれて内容も豊富になり実績を上げている森と水の源流館の「後南朝史跡ハイキング」や民俗調査は高く評価されて良いと思います。



▲金剛寺

従来、川上村の学術調査は非常に少なく、森と水の源流館職員諸氏の研究は民俗学、考古学、生物学など多岐にわたり、森と水の源流館館長の辻谷達雄氏が退任され、少し寂しいが、森と水の源流館職員諸氏の今後ますますのご鞭撻を願って止みません。

※ 注釈は5Pをごらん下さい。